

冬のアブラコウモリ



2012年1月10日の昼休み、生物準備室に入ると、附属中3年1組の青山さんが怪しげな包みを手に待ちかまえていた。「これ、どうしたらいいですか？」包みを開いてみると、生きているコウモリが固まっていた。**アブラコウモリ**（別名イエコウモリ）であった。日本人には最もなじみのあるコウモリである。

夏の夕暮れ、ばさばさと羽ばたき、旋回や急降下など不規則に飛び回る姿が印象的だ。江戸時代、日本の広い地方でこのコウモリのことを「**あぶらむし**」と呼んでいたことから、アブラコウモリの名が付いたそう。また、家の屋根裏や雨戸の戸袋、換気口のすきまなどをねぐらにしていることから、**イエコウモリ**とも呼ばれることがある。超音波を発して飛んでいる昆虫を捕食する。虫のいなくなる11月から3月には、冬眠するとされている。

本来ならこの時期は**冬眠中**のはずである。青山さんによると、中学校の昇降口で刑部先生が発見したそうである。何らかの原因で冬眠から目覚め、迷い込んでしまったのだろうか。そこで、コウモリを再びねぐらに戻すことにした。アブラコウモリは夜行性なので昼間はほとんど動かない。夜、活発に飛び回ることを期待して、**フタをしない容器**にコウモリを入れて外に出しておくことにした。

1月11日夜、計画実行。翌日の朝、容器の中にコウモリの姿は無かった。おそらく、夜の間にコウモリは飛び立ったのであろう。無事、ねぐらにたどり着いたことを祈るばかりである。